

『木ノ実で創る』

田島征三

日の出の森、第二処分場建設反対運動の中で、建設計画地のど真ん中に、ぼくたちが確保した「トラスト地」での生活は素晴らしかった。

夜は、獣たちの気配を感じ楽しみ、昼は、高みに咲く花の香りと、足元に転がる木ノ実の形に感動した。

木ノ実に対する興味は伊豆に暮らすようになって更に激しく盛り上がった。ぼくは夢中になり、さまざまな木ノ実を多量に拾い集め、天日干して柿渋に漬け保存した。また、落下したばかりの木ノ実の色に魅せられた。

保存された多量の木ノ実は、知的障がい者の施設で漉いて貰った巨大な和紙に、何千何万個も突き立て作品になった。生の木ノ実をぼくは、並べて撮影してもらい、二冊の絵本になっている。三冊目の絵本は、これまでの二冊とも、今までぼくが挑戦して来た何十冊かの絵本とも違うアートの歴史に残る大傑作にする予定だ。

木ノ実でアート作品を創ると言う事は、世間から『お子様向けチャッチイもの』と思われがちだ。だから、ドングリやマツボックリのような、ありふれた物は使わない。例えば、モミジバフーの実を1000個ぶら下げたとする。それを見て人々は『すごい!!200個はあるよね!』と叫ぶ。だから、1000個の木ノ実があるように見せるには、少なくとも20000個はぶら下げなければならない。なので、ぼくの木ノ実によるアート作品は、何千何万ものモクレンやタイザンボクの実を使っている。



ぼくの木ノ実作品の前で泣いている人がいる。

平塚市美術館でも練馬区美術館でも他の場所でも、何人も見かけている。その事をエッセイストで画家の故宮迫千鶴さんに話したら『木ノ実には、生きていた時の記憶があるのよ! その記憶が何万も自分に向かって来たら、人は感動して泣くしかないのよ!』と教えてくれた。だが、消費文明にまみれて生きている都会人が、大量の木ノ実を目撃した時、『ウワァ気持ち悪い!! 身体中ゾクゾクする』と目を背けるのが普通だ。でも、こんな事では、ぼくは挫けない。廃棄物処分場建設問題と向い合う事は、都会の悪しき現代文明と戦うことであり、その文明にとっぷり浸かった者達と闘うことなのだから!!

木ノ実たちの持っている記憶は、人々をして、本来人間が所有する生の営みを思い起こさせるチカラにならないだろうか!?

ぼくの創った木ノ実による絵本作品『ガオ』は都会育ちの母親達から『気持ち悪い虫みたい』と嫌がられる傾向があった。日本の絵本界に、「童画家」と称する「こども向け」の絵を描く者たちでなく、佐藤忠良・朝倉摂・元永定正・長新太・井上洋介・堀内誠一・和田誠など優れたアーティストやデザイナーを引き込んだ、福音館書店「こどものとも」初代編集長、松居直さんは『ガオ』について『この絵本を、大人たちが[気持ち悪い]などと騒ぐ前に、子どもたちが直接この木ノ実で出来た絵本を見たら、子どもたちの生きる力を、かき立てるだろう』と書いている。

ぼくは58年前、「こどものとも」で絵本界にデビューした(『ふるやのもり』)。今、制作中の木ノ実絵本第三弾『きのみのぼうけん』は、2022年11月号「こどものとも」800号記念号として出版される。